

日本と諸外国の学習項目対応表(数学)

中国

調査に使用した教科書は、日本が数研出版改訂版数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、A、B、中国が普通高中課程標準実験教科書人民教育出版社A版(2007年発行)数学1、2、3、4、5、1-1、1-2、2-1、2-2、2-3、4-1、4-4、4-5である。人民教育出版社発行の教科書は中国全土において中学校課程で約55%、高等学校課程で約70%のシェア(人民教育出版社編集部より)があり、中国の教育現場で多く採用されている。本調査で作成した学習項目対応表は、はじめて中国人留学生の数学指導を担当する指導者に向けた参考資料を意識した表である。そのため、「留学生が日本の教科書の内容と同等の内容を学んでいるのか」を指導者が把握しやすいように簡潔にまとめ、表記の違いや定義の違いなどの留意点も表に盛り込んでいる。さらに、高等教育機関等に進学を希望する外国人留学生の多くが受験すると見込まれる日本留学試験(EJU)のシラバスとも対比させ、試験の対策等を行う指導者にも扱いやすいよう工夫している。

A	A: 日本の教科書の内容と同等の内容を学んでいる。教科書における問題の解法や公式・性質の扱いなども日本とほとんど同じである。
B	B: 日本の教科書の内容と同等の内容を学んでいる。しかし、教科書における問題の解法や公式・性質の扱いなどが若干異なるため、教える際には注意を要する。
C	C: 日本の教科書の内容と同等の内容を学んでいない。教える際は始めから指導する必要がある。
	○: 文系・理系共通履修、○理: 理系のみ履修

E	○文理: 日本留学試験範囲 文系・理系共通項目
J	○理: 日本留学試験範囲 理系項目
U	

数研出版数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、A、B		A	B	C	日本留学試験 EJU	補足
数学Ⅰ						
1章 数と式						
1節 式と計算						
1.1.1 整式						
1.1.1.A 単項式と多項式		○			○文理	
1.1.1.B 同類項		○			○文理	
1.1.2 整式の加法と減法および乗法						
1.1.2.A 整式の加法・減法		○			○文理	
1.1.2.B 整式の乗法		○			○文理	
1.1.2.C 展開の公式		○			○文理	
1.1.2.D 式の展開の工夫		○			○文理	
1.1.3 因数分解						
1.1.3.A 共通因数のくくり出し		○			○文理	
1.1.3.B 2次式の因数分解		○			○文理	
1.1.3.C いろいろな方法による因数分解		○			○文理	
発展 3次式の展開と因数分解		○			○文理	
2節 実数						
1.2.4 実数						
1.2.4.A 有理数		○			○文理	
1.2.4.B 実数		○			○文理	
1.2.4.C 数の範囲と四則		○			○文理	
1.2.4.D 実数と数直線		○			○文理	
1.2.4.E 絶対値		○			○文理	
1.2.5 根号を含む式の計算						
1.2.5.A 平方根		○			○文理	
1.2.5.B 根号を含む式の計算		○			○文理	
1.2.5.C 分母の有理化		○			○文理	
1.2.5.D 式の値		○			○文理	
発展 (3次式の対称式)				○	○文理	※1
発展 2重根号				○	○文理	
3節 1次不等式						
1.3.6 1次不等式						
1.3.6.A 不等式		○			○文理	
1.3.6.B 不等式の性質		○			○文理	
1.3.6.C 不等式の解		○			○文理	
1.3.6.D 連立不等式		○			○文理	
1.3.7 1次不等式の利用						
1.3.7.A 1次不等式の応用		○			○文理	
1.3.7.B 絶対値を含む方程式・不等式		○			○文理	
研究 絶対値と場合分け		○			○文理	※2
コラム 実数				○	×	
2章 集合と命題						
2.1 集合						
2.1.A 集合とその表し方		○			○文理	
2.1.B 部分集合		○			○文理	
2.1.C 共通部分と和集合		○			○文理	
2.1.D 補集合		○			○文理	※3
2. 命題と条件						
2.2.A 命題		○			○文理	
2.2.B 条件と集合		○			○文理	
2.2.C 条件の否定		○			○文理	
2.2.D 「かつ」「または」と否定				○	○文理	※4
2.2.E 必要条件と十分条件		○			○文理	
3 命題と証明						
2.3.A 命題の逆、対偶、裏		○			○文理	
2.3.B 背理法		○			○文理	
発展 「すべてのxについてp」「あるxについてp」		○			×	
コラム 無理数と有理数、どちらが多いか				○	×	
※1	2次、3次対称式の記述はみられなかった。中学校範囲で因数分解を利用した式の値については学習済みである。					
※2	選択科目にある不等式を選択していない学生は学習していないと考えられる。					
※3	補集合の表記方法が「 $C_U A$ 」である。					
※4	ド・モルガンの法則についての記述がみられなかった。					

	A	B	C	EJU	補足
3章 2次関数					
1節 2次関数とグラフ					
3.1.1 関数とグラフ					
3.1.1.A 関数	○			○文理	
3.1.1.B 関数のグラフ	○			○文理	
3.1.2 2次関数のグラフ					
3.1.2.A $y=ax^2$ のグラフ	○			○文理	
3.1.2.B 点の移動	○			○文理	
3.1.2.C $y=ax^2+q$ のグラフ	○			○文理	
3.1.2.D $y=a(x-p)^2$ のグラフ	○			○文理	
3.1.2.E $y=a(x-p)^2+q$ のグラフ	○			○文理	
3.1.2.F $y=ax^2+bx+c$ のグラフ	○			○文理	
3.1.2.G 放物線の平行移動	○			○文理	
3.1.2.H 放物線の対称移動	○			○文理	
研究 グラフの移動		○		○文理	※5
3.1.3 2次関数の最大と最小					
3.1.3.A 2次関数の最大と最小	○			○文理	
3.1.3.B 定義域に制限がある場合の最大と最小			○	○文理	※6
3.1.3.C 最大・最小の応用	○			○文理	
研究 定義域の両端が動く場合の最大			○	○文理	
3.1.4 2次関数の決定					
3.1.4.A 頂点や軸に関する条件が与えられた場合	○			○文理	
3.1.4.B グラフ上の3点が与えられた場合	○			○文理	
2節 2次方程式と2次不等式					
3.2.5 2次方程式					
3.2.5.A 因数分解による解法	○			○文理	
3.2.5.B 2次方程式の解の公式	○			○文理	
3.2.5.C 2次方程式の実数解の個数と判別式	○			○文理	
3.2.6 グラフと2次方程式					
3.2.6.A 2次関数のグラフとx軸の共有点の座標	○			○文理	
3.2.6.B 2次関数のグラフとx軸の位置関係	○			○文理	
発展 放物線と直線の共有点	○			○文理	
3.2.7 グラフと2次不等式					
3.2.7.A 1次関数のグラフと1次不等式	○			○文理	
3.2.7.B 2次不等式	○			○文理	
3.2.7.C 2次不等式の応用		○		○文理	※7
3.2.7.D 連立不等式			○	○文理	※8
研究 絶対値を含む関数のグラフ		○		○文理	※9
発展 (2つの放物線の共有点)	○			○理	
コラム 経済現象と2次関数			○	○文理	
4章 図形と計量					
1節 三角比					
4.1.1 三角比					
4.1.1.A 正接・正弦・余弦	○			○文理	
4.1.1.B 三角比の表	○			○文理	
4.1.1.C 三角比の応用	○			○文理	
4.1.2 三角比の相互関係					
4.1.2.A 正弦・余弦・正接の関係			○	○文理	※10
4.1.2.B $90^\circ - \theta$ の三角比	○			○文理	
4.1.3 三角比の拡張					
4.1.3.A 座標を用いた三角比の定義	○			○文理	
4.1.3.B $180^\circ - \theta$ の三角比	○			○文理	
4.1.3.C 等式を満たす θ	○			○文理	
4.1.3.D 三角比の相互関係			○	○文理	※10
4.1.3.E 直線の傾きと正接	○			○文理	
2節 三角形への応用					
4.2.4 正弦定理			○	○文理	※11
4.2.5 余弦定理					
4.2.5.A 余弦定理	○			○文理	※12
4.2.5.B 三角形の角の余弦を表す式	○			○文理	
4.2.5.C 三角形の角の大きさと辺の長さの関係	○			○文理	
4.2.6 正弦定理と余弦定理の応用					
4.2.6.A 三角形の辺と角の決定	○			○文理	
発展 三角形の形状	○			×	
4.2.7 三角形の面積					
4.2.7.A 三角形の面積	○			○文理	
4.2.7.B いろいろな図形の計量			○	○文理	
4.2.7.C 三角形の内接円と面積			○	○文理	※13
発展 ヘロンの公式	○			×	
4.2.8 空間図形					
4.2.8 空間図形への応用			○	○文理	※14
※5	平行移動の概念的な記述はあるものの、 $y-q=f(x-p)$ の公式は扱っていない。				
※6	軸の方程式、定義域に変数が入っている場合は扱っていない。				
※7	例題にはないが、章末問題に記述がみられた。				
※8	2次不等式を用いた連立不等式の問題の記述はみられなかった。				
※9	$y= x $ のグラフの説明のみ記述されていた。また、演習問題には $y= x-2 $ に関する問題の記述がみられた。				
※10	余弦と正接に関する関係式の記述がみられなかった。				
※11	外接円に関する記述がみられなかった。				
※12	証明はベクトルを用いた証明であった。				
※13	章末問題に、ヘロンの公式と交えた問題の記述がみられた。				
※14	直方体、四面体への応用問題の記述はみられなかった。長さの数値は計算しやすい数字ではなく、実際の長さが考えられていた。				

		A	B	C	EJU	補足
5章 データの分析						
5.1 データの整理						
	5.1.A データ	○			×	
	5.1.B 度数分布表	○			×	
	5.1.C ヒストグラム	○			×	
5.2 データの代表値						
	5.2.A 平均値	○			×	
	5.2.B 中央値	○			×	
	5.2.C 最頻値	○			×	
5.3 データの散らばりと四分位範囲						
	5.3.A 範囲			○	×	
	5.3.B 四分位数			○	×	
	5.3.C 四分位範囲, 四分位偏差			○	×	
	5.3.D 箱ひげ図			○	×	
	5.3.E ヒストグラムと箱ひげ図			○	×	※15
5.4 分散と標準偏差						
	5.4.A 分散と標準偏差	○			×	
	研究 変量の変換	○理			×	
5.5 データの相関						
	5.5.A 散布図	○			×	
	5.5.B 正の相関関係, 負の相関関係	○			×	
	5.5.C 相関係数	○			×	
	補足 相関表			○	×	
	補足 表計算ソフトによるデータ分析	○			×	
数学Ⅱ						
1章 式と証明						
1節 式と計算						
1.1.1 3次式の展開と因数分解						
	1.1.1.A 3次式の展開			○	○理	
	1.1.1.B 3次式の因数分解			○	○理	
1.1.2 二項定理						
	1.1.2.A パスカルの三角形	○理			○理	
	1.1.2.B 二項定理	○理			○理	
	1.1.2.C 二項定理の応用			○理	○理	※16
	研究 $(a+b+c)^n$ の展開式			○	○理	
1.1.3 整式の割り算						
	1.1.3.A 整式の割り算			○	○理	
1.1.4 分数式とその計算						
	1.1.4.A 分数式	○			○理	
	1.1.4.B 分数式の四則計算	○			○理	
1.1.5 恒等式						
	1.1.5.A 恒等式			○	○理	
	研究 2つの文字についての恒等式			○	○理	
2節 等式と不等式の証明						
1.2.6 等式の証明						
	1.2.6.A 恒等式の証明			○	○理	
	1.2.6.B 条件付きの等式			○	○理	
1.2.7 不等式の証明						※17
	1.2.7.A 実数の大小関係	○			○理	
	1.2.7.B 実数の平方	○			○理	
	1.2.7.C 正の数の大小と平方の大小	○			○理	
	1.2.7.D 絶対値と不等式	○			○理	
	1.2.7.E 相加平均と相乗平均	○			○理	
	コラム 正方形は効率的			○	×	
※15	ヒストグラムのみ記述がみられた。					
※16	3変数になった場合の問題に関する記述はみられなかった。					
※17	選択科目にある不等式を選択していない学生は学習していないと考えられる。					

	A	B	C	EJU	補足
2章 複素数と方程式					
2.1 複素数					
2.1.A 複素数	○			○理	
2.1.B 複素数の計算	○			○理	
2.1.C 負の数の平方根			○	○理	
2.2 2次方程式の解と判別式					
2.2.A 2次方程式の解			○	○理	※18
2.2.B 2次方程式の解の種類の判別			○	○理	
2.3 解と係数の関係					
2.3.A 2次方程式の解と係数の関係	○			○理	
2.3.B 2次式の因数分解			○	○理	
2.3.C 2数を解とする2次方程式			○	○理	
2.3.D 2次方程式の実数解の符号			○	○理	
2.4 剰余の定理と因数定理					
2.4.A 剰余の定理			○	○理	
2.4.B 因数定理			○	○理	
研究 組立除法			○	○理	
2.5 高次方程式					
2.5.A 因数分解による高次方程式の解法			○	○理	
2.5.B 因数定理を利用する高次方程式の解法			○	○理	
2.5.C 高次方程式の解と係数			○	○理	
研究 方程式の解と共役な複素数			○	○理	
発展 3次方程式の解と係数の関係		○		×	※19
コラム 複素数によって説明される現象			○	×	
3章 図形と方程式					
1節 点と直線					
3.1.1 直線上の点					
3.1.1.A 数直線上の2点間の距離	○			○理	
3.1.1.B 線分の内分点, 外分点			○	○理	※20
3.1.2 平面上の点					
3.1.2.A 2点間の距離	○			○理	
3.1.2.B 線分の内分点, 外分点の座標			○	○理	※20
3.1.2.C 点に関して対称な点			○	○理	
3.1.3 直線の方程式					
3.1.3.A x, y の1次方程式の表す図形	○			○理	
3.1.3.B 直線の方程式	○			○理	
3.1.4 2直線の関係					
3.1.4.A 2直線の平行と垂直	○			○理	
3.1.4.B 2直線の関係と連立1次方程式の解	○			○理	
3.1.4.C 2直線の交点を通る直線の方程式			○	○理	
3.1.4.D 直線に関して対称な点			○	○理	
3.1.4.E 点と直線の距離	○			○理	
3.1.4.F 図形の性質の証明			○	○理	
2節 円					
3.2.5 円の方程式					
3.2.5.A 円の方程式	○			○理	
3.2.5.B $x^2 + y^2 + lx + my + n = 0$ の表す図形	○			○理	
3.2.6 円と直線					
3.2.6.A 円と直線の共有点	○			○理	
3.2.6.B 円と直線の位置関係	○			○理	
3.2.6.C 円の接線の方程式			○	○理	
3.2.7 2つの円					
3.2.7.A 2つの円の位置関係	○			○理	
3.2.7.B 2つの円の共有点		○		○理	※21
3節 軌跡と領域					
3.3.8 軌跡と方程式					
3.3.9 不等式の表す領域					
3.2.9.A 直線を境界線とする領域	○			○理	
3.2.9.B 円を境界線とする領域			○	○理	
3.2.9.C 連立不等式の表す領域			○	○理	※23
3.2.9.D 領域と最大・最小	○			○理	
3.2.9.E 領域を利用した証明法			○	○理	
研究 放物線を境界線とする領域			○	○理	
※18	2次方程式の解について、虚数範囲に関する記述はみられなかった。				
※19	章末問題の証明問題において、記述がみられた。				
※20	内分・外分に関する記述がみられなかった。				
※21	図では記述しているが、演習問題等の記述がみられなかった。				
※22	楕円の方程式を導出する際に、軌跡を定義している。				
※23	円と直線における連立不等式を表す領域に関する記述はみられなかった。				

	A	B	C	EJU	補足
4章 三角関数					
1節 三角関数					
4.1.1 一般角と弧度法					
4.1.1.A 一般角	○			○理	
4.1.1.B 動径の表す角	○			○理	
4.1.1.C 弧度法	○			○理	
4.1.1.D 扇形の弧の長さと同面積	○			○理	
4.1.2 三角関数					
4.1.2.A 一般角の三角関数	○			○理	
4.1.2.B 三角関数の相互関係	○			○理	
4.1.3 三角関数の性質					
4.1.3.A $\theta + 2n\pi$ の三角関数	○			○理	
4.1.3.B $-\theta$ の三角関数	○			○理	
4.1.3.C $\theta + \pi, \theta + \pi/2$ の三角関数	○			○理	
4.1.4 三角関数のグラフ					
4.1.4.A $y = \sin\theta, y = \cos\theta$ のグラフ	○			○理	
4.1.4.B $y = \tan\theta$ のグラフ	○			○理	
4.1.4.C 三角関数のグラフの特徴	○			○理	
4.1.4.D いろいろな三角関数のグラフ	○			○理	
4.1.5 三角関数の応用					
4.1.5.A 三角関数を含む方程式、不等式			○	○理	※24
4.1.5.B 三角関数を含む関数の最大値、最小値			○	○理	
2節 加法定理					
4.2.6 加法定理					
4.2.6.A 正弦、余弦の加法定理	○			○理	
4.2.6.B 正接の加法定理	○			○理	
4.2.6.C 2直線のなす角			○	○理	
研究 点の回転			○	○理	
コラム 振動現象と三角関数	○			×	
4.2.7 加法定理の応用					
4.2.7.A 2倍角の公式	○			○理	
4.2.7.B 半角の公式	○			○理	
4.2.7.C 三角関数を含む方程式、不等式			○	○理	
発展 和と積の公式	○			○理	
4.2.8 三角関数の合成					
4.2.8.A 三角関数の合成	○			○理	
4.2.8.B 三角関数の合成の応用	○			○理	※25
5章 指数関数と対数関数					
5.1 指数の拡張					
5.1.A 0や負の整数の指数	○			○理	
5.1.B 累乗根	○			○理	
5.1.C 有理数の指数	○			○理	
5.1.D 無理数の指数	○			○理	
研究 負の数の n 乗根	○			○理	
5.2 指数関数					
5.2.A 指数関数のグラフ	○			○理	
5.2.B 指数関数の性質			○	○理	※26
5.3 対数とその性質					
5.3.A 対数	○			○理	
5.3.B 対数の性質	○			○理	
5.3.C 底の変換公式	○			○理	
5.4 対数関数					
5.4.A 対数関数のグラフ	○			○理	
5.4.B 対数関数の性質	○			○理	
5.4.C 対数関数を含む方程式、不等式			○	○理	※27
5.4.D 対数関数を含む関数の最大値、最小値			○	○理	
5.5 常用対数					
5.5.A 常用対数	○			○理	※28
5.5.B 常用対数の応用			○	○理	※29
研究 対数と無理数			○	×	
※24	初歩的な問題は章末問題に記述があるものの、 $\theta + \alpha$ の範囲における方程式・不等式の問題は扱っていない。				
※25	公式の記述はみられなかったが、例および章末問題には合成を利用する問題の記述がみられた。				
※26	初歩的な問題は章末問題に記述があるものの、 $a^x = t$ と置き換えるような方程式・不等式の問題は扱っていない。				
※27	真数条件を意識した方程式・不等式の問題は扱っていない。				
※28	常用対数の表記方法は「lgM」である。				
※29	「pH」や「地震」に関する説明はみられたが、累乗の桁数を求める問題は扱っていない。				

	A	B	C	EJU	補足
6章 微分法と積分法					
1節 微分係数と導関数					
6.1.1 微分係数					
6.1.1.A 平均の速さと瞬間の速さ	○			○理	※30
6.1.1.B 平均変化率と微分係数	○			○理	
6.1.1.C 極限值と微分係数			○	○理	※31
6.1.1.D 微分係数の図形的な意味	○			○理	
発展 関数の極限值			○	○理	
6.1.2 導関数					
6.1.2.A 導関数	○			○理	
6.1.2.B 導関数の性質	○			○理	
6.1.2.C 変数が x, y でない場合の導関数			○	○理	※32
研究 関数 x^n の導関数の公式の証明			○	○理	
2節 導関数の応用					
6.2.3 接線					
6.2.3.A 接線の方程式	○			○理	
6.2.3.B 曲線上にない点から曲線に引いた接線の方程式			○	○理	
6.2.4 関数の値の変化					
6.2.4.A 関数の増減	○			○理	
6.2.4.B 関数の極大、極小	○			○理	
6.2.5 最大値・最小値	○			○理	
6.2.6 関数のグラフと方程式・不等式					
6.2.6.A 方程式の実数解の個数			○	○理	
6.2.6.B 不等式の証明	○			○理	
3節 積分法					
6.3.7 不定積分					
6.3.7.A 導関数と不定積分			○理	○理	
6.3.7.B 不定積分の性質			○理	○理	
6.3.8 定積分					
6.3.8.A 面積と不定積分			○理	○理	
6.3.8.B 定積分	○理			○理	※33
6.3.8.C 定積分の性質			○理	○理	※34
6.3.8.D 定積分と微分法			○理	○理	
6.3.9 面積					
6.3.9.A 曲線と x 軸の間の面積	○理			○理	
6.3.9.B 2つの曲線の間の面積	○理			○理	
6.3.9.C 絶対値のついた関数の定積分			○理	○理	
6.3.9.D 曲線と接線で囲まれた図形面積			○理	○理	
コラム 微分積分学の基本定理		○理		○理	※35
研究 放物線と直線で囲まれた図形面積			○理	○理	
研究 $(x+a)^n$ の微分と積分			○理	○理	
数学III					
1章 複素数平面					
1.1 複素数平面					
1.1.A 複素数平面	○			○理	
1.1.B 複素数の実数倍			○	○理	
1.1.C 複素数の加法、減法	○			○理	
1.1.D 共役な複素数	○			○理	
1.1.E 絶対値と2点間の距離			○	○理	※36
1.2 複素数の極形式と乗法、除法					
1.2.A 極形式			○	○理	
1.2.B 複素数の乗法、除法			○	○理	
1.2.C 複素数の積と商の図形的な意味			○	○理	
1.3 ド・モアブルの定理					
1.3.A ド・モアブルの定理			○	○理	
1.3.B n 乗根			○	○理	
1.4 複素数と図形					
1.4.A 線分の内分点、外分点			○	○理	
1.4.B 方程式の表す図形			○	○理	
1.4.C 一般の点を中心とする回転			○	○理	
1.4.D 半直線のなす角			○	○理	
研究 $w=1/z$ が描く図形			○	○理	
※30 $x = x_0$ における微分係数の表し方として、 $y' _{x=x_0}$ という記述がみられた。					
※31 極限值に関する説明がみられなかった。					
※32 $d/dx, ds/dt$ などの表現がみられなかった。					
※33 不定積分を定義していないため、リーマン和の極限を定積分と記述している。					
※34 区間の反転、同区間の性質に関する記述はみられなかった。					
※35 $F'(x) = f(x)$ の記述はあるが、原始関数、不定積分の記述はなく、定積分を解くために必要な関係として扱われている。					
※36 $ \alpha ^2 = \alpha\bar{\alpha}$ に関する記述はみられなかった。					

	A	B	C	EJU	補足
2章 式と曲線					
1節 2次曲線					
2.1.1 放物線					
2.1.1.A 放物線の方程式		○		○理	※37
2.1.1.B y軸を軸とする放物線	○			○理	
2.1.2 楕円					
2.1.2.A 楕円の方程式	○			○理	
2.1.2.B 焦点がy軸上にある楕円	○			○理	
2.1.2.C 円と楕円	○			○理	
2.1.2.D 軌跡と楕円	○			○理	
2.1.3 双曲線					
2.1.3.A 双曲線の方程式	○			○理	
2.1.3.B 焦点がy軸上にある双曲線	○			○理	
2.1.3.C 直角双曲線	○			○理	
2.1.4 2次曲線の平行移動	○理			○理	※38
2.1.4.A 曲線 $F(x, y) = 0$ の平行移動			○	○理	
2.1.4.B $ax^2 + by^2 + cx + dy + e = 0$ の表す図形			○	○理	
研究 直角双曲線 $xy = 1$			○	○理	
2.1.5 2次曲線と直線					
2.1.5.A 2次曲線と直線の共有点	○理			○理	
2.1.5.B 2次曲線の接線の方程式			○	○理	
研究 接線の方程式の一般形			○	○理	
コラム 2次曲線の焦点の性質	○			×	
2.1.6 2次曲線の性質	○			○理	
2節 媒介変数表示と極座標					※39
2.2.7 曲線の媒介変数表示					
2.2.7.A 媒介変数表示	○			○理	
2.2.7.B 直線群と媒介変数表示	○			○理	
2.2.7.C 一般角 θ を用いた円の媒介変数表示	○			○理	
2.2.7.D 楕円の媒介変数表示	○			○理	
2.2.7.E 双曲線の媒介変数表示	○			○理	
2.2.7.F 媒介変数で表された曲線の平行移動			○	○理	
2.2.7.G サイクロイド	○			○理	
研究 いろいろな曲線の媒介変数表示(アステロイド、カージオイド)		○		○理	※40
2.2.8 極座標と極方程式					
2.2.8.A 極座標	○			○理	
2.2.8.B 極座標と直交座標の関係	○			○理	
2.2.8.C 極方程式	○			○理	
2.2.8.D 2次曲線の極方程式			○	○理	
2.2.9 コンピュータといろいろな曲線					
2.2.9.A 媒介変数で表された曲線			○	○理	
2.2.9.B 極方程式で表された曲線			○	○理	
コラム ミルクティーを照らす光			○	×	
3章 関数					
3.1 分数関数					
3.1.A $y = k/x$ のグラフ	○			○理	
3.1.B $y = k/(x-p) + q$ のグラフ			○	○理	※41
3.1.C $y = ax + b/cx + d$ のグラフ			○	○理	
3.1.D 分数関数のグラフと直線の共有点			○	○理	
3.2 無理関数					
3.2.A $y = \sqrt{ax}$ のグラフ	○			○理	
3.2.B $y = \sqrt{ax+b}$ のグラフ			○	○理	※42
3.2.C 無理関数のグラフと直線の共有点			○	○理	
3.3 逆関数と合成関数					
3.2.A 逆関数			○	○理	
3.2.B 逆関数の性質			○	○理	
3.2.C 指数関数の逆関数	○			○理	
3.2.D 合成関数			○	○理	
コラム あみだくじ、ひっくり返してもあみだくじ			○	×	
※37	放物線の方程式の表記方法「方程式: $y^2 = 2px$, 焦点: $(p/2, 0)$, 準線: $x = p/2$ 」である。				
※38	2次曲線の方程式が「 $f(x, y) = 0$ 」で表されることのみ記述がみられた。				
※39	選択科目にある媒介変数と極座標を選択していない学生は学習していないと考えられる。				
※40	概形のみ。具体的な式の記述はみられなかった。				
※41	平行移動、漸近線に関する定義はないが、例として定義域・値域に関する記述はみられた。				
※42	平行移動に関する定義はないが、例として定義域・値域に関する記述はみられた。				

	A	B	C	EJU	補足
4章 極限					※43
1節 数列の極限					
4.1.1 数列の極限					
4.1.1.A 数列の収束と発散			○	○理	
4.1.1.B 数列の極限の性質			○	○理	
4.1.2 無限等比級数					
4.1.2.A 無限等比級数の極限			○	○理	
4.1.2.B 無限等比数列の極限の応用			○	○理	
4.1.2.C 漸化式で定められる数列の極限			○	○理	
4.1.3 無限級数					
4.1.3.A 無限級数の収束と発散			○	○理	
4.1.3.B 無限等比級数			○	○理	
4.1.3.C 循環小数と無限等比級数			○	○理	
コラム 1=0.9999...			○	×	
4.1.3.D 無限級数の性質			○	○理	
4.1.3.E 無限級数の収束・発散と項の極限			○	○理	
2節 関数の極限					
4.2.4 関数の極限					
4.2.4.A $x \rightarrow a$ のときの関数の極限とその性質			○	○理	
4.2.4.B 極限の計算			○	○理	
4.2.4.C 極限が有限な値でない場合			○	○理	
4.2.4.D 関数の片側からの極限			○	○理	
4.2.4.E $x \rightarrow \infty, x \rightarrow -\infty$ のときの関数の極限			○	○理	
4.2.4.F 指数関数, 対数関数の極限			○	○理	
4.2.5 三角関数と極限					
4.2.5.A 三角関数の極限			○	○理	
4.2.5.B $\sin x/x$ の極限			○	○理	
4.2.5.C 三角関数の極限の応用			○	○理	
4.2.6 関数の連続性			○		
4.2.6.A 関数の連続性			○	○理	
4.2.6.B 連続関数の性質			○	○理	
コラム 中間値の定理からその存在がわかる不思議な現象			○	×	
5章 微分法					
5.1 微分係数と導関数					
5.1.A 微分係数			○	○理	
5.1.B 微分可能と連続			○		
5.1.C 導関数		○		○理	※44
5.2 導関数の計算					
5.2.A 導関数の性質		○		○理	※45
5.2.B 積の導関数		○		○理	
5.2.C 商の導関数		○		○理	
5.2.D 合成関数の微分法	○理			○理	
5.2.E 逆関数の微分法			○	○理	
5.3 いろいろな関数の導関数					
5.3.A 三角関数の導関数		○		○理	※46
5.3.B 対数関数の導関数		○		○理	
5.3.C 指数関数の導関数		○		○理	
5.4 第 n 次導関数			○	○理	
5.5 関数のいろいろな表し方と導関数					
5.5.A 方程式 $F(x, y)=0$ で定められる関数の導関数			○	○理	
5.5.B 媒介変数表示と導関数			○	○理	
※43 全ての項目について記述がみられなかった。					
※44 $d/dx, dy/dx$ などの表現に関する記述がみられなかったが、 y'_x, u'_x という表現がみられた。					
※45 公式集の記述はあるが、証明はしていない。合成関数の微分を扱っているのは理系のみである。					
※46 公式集の記述はあるが、証明はしていない。					

	A	B	C	EJU	補足
6章 微分法の実用					
1節 導関数の応用					
6.1.1 接線と法線					
6.1.1.A 曲線 $y=f(x)$ の接線と法線			○	○理	※47
6.1.1.B 共有点で同じ接線をもつ2つの曲線			○	○理	
6.1.1.C $F(x, y)=0$ で表される曲線の接線と法線			○	○理	
研究 方程式の重解と微分			○	○理	
6.1.2 平均値の定理					
6.1.2.A 平均値の定理			○	○理	
6.1.2.B 平均値の定理の利用			○	○理	
発展 平均値の定理の証明			○	○理	
6.1.3 関数の値の変化					
6.1.3.A 関数の増加と減少			○	○理	※48
6.1.3.B 関数の極大と極小			○	○理	
6.1.4 関数の最大と最小		○		○理	※49
6.1.5 関数のグラフ					
6.1.5.A 曲線の凹凸			○	○理	
6.1.5.B 関数のグラフの概形			○	○理	
6.1.5.C 第2次導関数と極値			○	○理	
6.1.6 方程式, 不等式への応用					
6.1.6.A 不等式の証明	○			○理	
6.1.6.B 方程式の実数解の個数			○	○理	
2節 速度と近似式					
6.2.7 速度と加速度					
6.2.7.A 直線上の点の運動			○	○理	※50
6.2.7.B 平面上の点の運動			○	○理	
6.2.8 近似式			○	×	
発展 1次と2次の近似式			○	×	
7章 積分法					
1節 不定積分					
7.1.1 不定積分とその基本性質					
7.1.1.A 不定積分			○理	○理	
7.1.1.B 不定積分の基本性質			○理	○理	
7.1.1.C 三角関数, 指数関数の不定積分			○理	○理	
7.1.2 置換積分法					
7.1.2.A $f(ax+b)$ の不定積分			○理	○理	
7.1.2.B 置換積分法			○理	○理	
7.1.2.C $f(g(x))g'(x)$ の不定積分			○理	○理	
7.1.2.D $g'(x)/g(x)$ の不定積分			○理	○理	
7.1.3 部分積分法			○理	○理	
7.1.4 いろいろな関数の不定積分					
7.1.4.A 分数関数の不定積分			○理	○理	
7.1.4.B 三角関数に関する不定積分			○理	○理	
2節 定積分					
7.2.5 定積分とその基本性質					
7.2.5.A 定積分	○理			○理	
7.2.5.B 定積分の性質			○理	○理	※51
7.2.5.C 絶対値のついた関数の定積分	○理			○理	
7.2.6 定積分の置換積分法					
7.2.6.A 定積分の置換積分法			○理	○理	
7.2.6.B 偶関数, 奇関数の定積分			○理	○理	
7.2.7 定積分の部分積分法			○理	○理	
研究 $\int_0 \rightarrow \pi/2 \sin x dx$ の値			○理	○理	
研究 $\int_0 \rightarrow \pi/2 e^x \sin x dx, \int_0 \rightarrow \pi/2 e^x \cos x dx$ の値			○理	○理	
7.2.8 定積分の種々の問題					
7.2.8.A 定積分で表された関数			○理	○理	
7.2.8.B 定積分と和の極限	○理			○理	
7.2.8.C 定積分と不等式			○理	○理	
コラム 不定積分をいつでも計算で求められるか?			○理	×	
8章 積分法の実用					
8.1 面積					
8.1.A 曲線 $y=f(x)$ で定まる図形的面積			○理	○理	※52
8.1.B 曲線 $x=g(y)$ で定まる図形的面積			○理	○理	
8.1.C 曲線で囲まれた図形的面積			○理	○理	※53
8.1.D 媒介変数表示と面積			○理	○理	
8.2 体積					
8.2.A 定積分と体積			○理	○理	
8.2.B 回転体の体積			○理	○理	
研究 一般の回転体の体積			○理	○理	
8.3 曲線の長さ					
8.3.A 媒介変数表示された曲線の長さ			○理	○理	
8.3.B 曲線 $y=f(x)$ の長さ			○理	○理	
8.4 速度と道のり					
8.4.A 直線上を運動する点の道のり		○理		○理	※54
8.4.B 平面上を運動する点の道のり			○理	○理	
発展 微分方程式			○理	×	
※47 接線の記述はあるが, 法線に関する記述はみられなかった。					
※48 閉区間において連続で, 微分可能な2つの関数についての性質に関する記述はみられなかった。					
※49 複雑な関数の最大・最小の問題は扱っていない。					
※50 速度に関する記述はみられるが, 加速度に関する記述はみられなかった。					
※51 区間の反転, 同区間の性質に関する記述はみられなかった。					
※52 $f(x) \leq 0$ における定積分についての記述はみられなかった。					
※53 楕円・サイクロイドについて面積に関する記述はみられなかった。					
※54 物理の内容と関連付けて記述されている。					

数学A		A	B	C	EJU	補足
1章 場合の数と確率						
1節 場合の数						
1.1.1 集合の要素の個数						
	1.1.1.A 和集合の要素の個数	○			○文理	
	1.1.1.B 補集合の要素の個数	○			○文理	
	研究 3つの集合の和集合の要素の個数		○		○文理	※55
1.1.2 場合の数						
	1.1.2.A 樹形図	○理			○文理	
	1.1.2.B 和の法則	○理			○文理	
	1.1.2.C 積の法則	○理			○文理	
1.1.3 順列						
	1.1.3.A 順列	○理			○文理	
	1.1.3.B 順列の計算	○理			○文理	
1.1.4 円順列・重複順列						
	1.1.4.A 円順列			○理	○文理	
	1.1.4.B 重複順列	○理			○文理	
1.1.5 組合せ						
	1.1.5.A 組合せ	○理			○文理	
	1.1.5.B 組合せの計算	○理			○文理	
	1.1.5.C 組分け			○理	○文理	
	1.1.5.D 同じものを含む順列	○理			○文理	
	研究 重複を許して取る組合せ			○理	○文理	
	発展 (重複組合せの記号)				x	
2節 確率						
1.2.6 事象と確率						
	1.2.6.A 確率の意味	○			○文理	
	1.2.6.B 試行と事象	○			○文理	
	1.2.6.C 事象と確率	○			○文理	
1.2.7 確率の基本性質						
	1.2.7.A 積事象と和事象	○			○文理	
	1.2.7.B 排反事象	○			○文理	
	1.2.7.C 確率の基本性質	○			○文理	
	1.2.7.D 和事象の確率	○			○文理	
	1.2.7.E 余事象の確率	○			○文理	
1.2.8 独立な試行の確率						
	1.2.8.A 独立な試行	○理			○文理	
	1.2.8.B 独立な試行の確率	○理			○文理	
	1.2.8.C 3つ以上の独立な試行	○理			○文理	
1.2.9 反復試行の確率						
	1.2.9.A 反復試行の確率	○理			○文理	
	1.2.9.B 反復試行の確率の応用			○理	○文理	※56
1.2.10 条件付き確率						
	1.2.10.A 条件付き確率	○理			○文理	
	1.2.10.B 確率の乗法定理		○理		○文理	※57
	1.2.10.C やや複雑な事象の確率			○	○文理	
	研究 原因の確率	○			○文理	
※55	公式は表記されていないが、3つの集合について、「 \cap 」「 \cup 」についての記述はみられた。					
※56	例としていくつか記述しているが、数直線上を点が移動する反復試行の確率の問題は扱っていない。					
※57	条件付き確率の公式変形での記述はみられるが、乗法定理とは表記していない。					

	A	B	C	EJU	補足
2章 図形の性質					
1節 平面図形					
2.1.1 三角形の辺の比					
2.1.1.A 線分の内分・外分			○	○文理	
2.1.1.B 三角形の角の二等分線の比	○			○文理	
2.1.2 三角形の外心, 内心, 重心					
2.1.2.A 外心	○			○文理	
2.1.2.B 内心	○			○文理	
2.1.2.C 重心	○			○文理	
2.1.2.D 正三角形の重心, 外心, 内心			○	○文理	
研究 三角形の垂心	○			○文理	
2.1.3 チェバの定理, メネラウスの定理					
2.1.3.A チェバの定理			○	○文理	
2.1.3.B メネラウスの定理			○	○文理	
研究 三角形の辺と角	○			○文理	
2.1.4 円に内接する四角形					
2.1.4.A 円周角の定理	○			○文理	
2.1.4.B 円に内接する四角形の性質	○			○文理	
2.1.4.C 四角形が円に内接するための条件	○			○文理	
2.1.5 円と直線					
2.1.5.A 円の接線	○			○文理	
2.1.5.B 接線と弦の作る角	○			○文理	
2.1.6 方べきの定理					
2.1.5.A 方べきの定理	○			○文理	
2.1.5.B 方べきの定理の逆	○			○文理	
2.1.7 2つの円の位置関係					
2.1.7.A 2つの円の位置関係	○			○文理	
2.1.7.B 共通接線			○	○文理	
2.1.8 作図					
2.1.8.A 平行な直線の作図			○	×	
2.1.8.B 線分の内分点, 外分点の作図			○	×	
2.1.8.C いろいろな長さの線分の作図			○	×	
研究 正五角形の作図			○	×	
2節 空間図形					
2.2.9 直線と平面					
2.2.9.A 2直線の位置関係	○			○文理	
2.2.9.B 直線と平面の位置関係	○			○文理	
2.2.9.C 2平面の位置関係	○			○文理	
研究 三垂線の定理			○	×	
2.2.10 多面体					
2.2.10.A 多面体	○			○文理	
2.2.10.B 正多面体の体積	○			○文理	
3章 整数の性質					
1節 約数と倍数					
3.1.1 約数と倍数					
3.1.1.A 約数と倍数	○			○文理	※58
3.1.1.B 倍数の判定法			○	○文理	
3.1.1.C 素数と素因数分解	○			○文理	※59
研究 等式を満たす整数 x, y の組			○	○文理	
3.1.2 最大公約数と最小公倍数					
3.1.2.A 最大公約数と最小公倍数	○			○文理	
3.1.2.B 互いに素			○	○文理	
研究 最大公約数と最小公倍数の性質			○	○文理	
3.1.3 整数の割り算と商および余り					
3.1.3.A 割り算における商と余り			○	○文理	※60
3.1.3.B 余りによる整数の分類			○	○文理	
研究 自然数の積と素因数の個数			○	○文理	
研究 割り算の余りの性質			○	○文理	
発展 合同式	○			×	
2節 ユークリッドの互除法					
3.2.4 ユークリッドの互除法					
3.2.4.A 割り算と最大公約数			○	○文理	
3.2.4.B ユークリッドの互除法	○			○文理	※61
3.2.4.C 最大公約数を表す式			○	○文理	
3.2.5 1次不定方程式					
3.2.5.A 1次不定方程式と整数解			○	○文理	
3.2.5.B 1次不定方程式の利用			○	○文理	
研究 a, b 互いに素であるための条件			○	○文理	
コラム ユークリッドの互除法の優秀性			○	×	
3節 整数の性質の活用					
3.3.6 分数と小数					
3.3.6.A 分数と有限小数, 循環小数	○			○文理	
3.3.6.B 有限小数, 循環小数で表される条件			○	○文理	
3.3.7 n 進法					
3.3.7.A n 進法	○			○文理	
3.3.7.B n 進法的小数			○	○文理	
3.3.7.C 2進法の四則計算			○	○文理	
コラム 実数の分類			○	×	
コラム 数学史の中の整数			○	×	
※58 小学校範囲で学習済みだが、 $a = bk$ といった文字を使った式を扱ったかどうかはわからない。					
※59 小学校範囲で学習済みだが、約数の個数について扱ったかどうかはわからない。					
※60 割り切れる・割り切れないという表記はない。					
※61 アルゴリズムと証明という章において記述はあるが、証明はしていない。					

数学B		A	B	C	EJU	補足
1章 平面上のベクトル						
1節 平面上のベクトルとその演算						
1.1.1 平面上のベクトル						
	1.1.1.A 有向線分とベクトル	○			○理	
	1.1.1.B ベクトルの相等	○			○理	
1.1.2 ベクトルの演算						
	1.1.2.A ベクトルの加法	○			○理	
	1.1.2.B 逆ベクトルと零ベクトル	○			○理	
	1.1.2.C ベクトルの減法	○			○理	
	1.1.2.D ベクトルの実数倍	○			○理	
	1.1.2.E ベクトルの平行	○			○理	
	1.1.2.F ベクトルの分解	○			○理	
1.1.3 ベクトルの成分						
	1.1.3.A ベクトルの成分	○			○理	
	1.1.3.B 成分によるベクトルの演算	○			○理	
	1.1.3.C 点の座標とベクトルの成分	○			○理	
1.1.4 ベクトルの内積						
	1.1.4.A ベクトルの内積	○			○理	
	1.1.4.B 内積と成分	○			○理	
	1.1.4.C ベクトルのなす角	○			○理	
	1.1.4.D 内積の性質	○			○理	
	研究 三角形の面積	○			○理	
2節 ベクトルと平面図形						
1.2.5 位置ベクトル						
	1.2.5.A 位置ベクトル		○		○理	※62
	1.2.5.B 線分の内分点・外分点の位置ベクトル			○	○理	
	1.2.5.C 三角形の重心の位置ベクトル			○	○理	
1.2.6 ベクトルと図形						
	1.2.6.A 一直線上の点	○			○理	
	1.2.6.B 2直線の交点			○	○理	
	1.2.6.C 内積の利用			○	○理	
1.2.7 ベクトル方程式						
	1.2.7.A 直線と方向ベクトル		○理		○理	※63
	1.2.7.B 異なる2点を通る直線のベクトル方程式			○	○理	
	1.2.7.C 平面上の点の存在範囲			○	○理	
	1.2.7.D 直線と法線ベクトル			○	○理	
	1.2.7.E 円のベクトル方程式			○	○理	
	研究 点と直線の距離			○	○理	
	研究 点の存在範囲の図示			○	○理	
	コラム 地球は動いている			○	×	
2章 空間のベクトル						
2.1 空間の座標						
	2.1.A 空間の点の座標	○理			○理	
	2.1.B 2点間の距離	○理			○理	
2.2 空間のベクトル						
	2.2.A 空間のベクトル	○理			○理	
	2.2.B ベクトルの分解	○理			○理	
2.3 ベクトルの成分						
	2.3.A ベクトルの成分	○理			○理	
	2.3.B 成分によるベクトルの演算	○理			○理	
	2.3.C 点の座標とベクトルの成分	○理			○理	
2.4 ベクトルの内積						
	2.4 1.2.6.C 内積の利用	○理			○理	
2.5 位置ベクトル						
	2.5 1.2.5.A 位置ベクトル			○理	○理	※64
2.6 ベクトルと図形						
	2.6.A 一直線上の点	○理			○理	
	2.6.B 同じ平面上にある点	○理			○理	
	発展 点が平面ABC上にある条件の別の形			○理	×	
	2.6.C 内積の利用			○理	○理	
	2.6.D 座標空間における直線			○理	○理	
2.7 座標空間における図形						
	2.7.A 線分の内分点・外分点の座標			○理	○理	
	2.7.B 座標軸に垂直な平面の方程式			○理	○理	
	2.7.C 球面の方程式			○理	○理	
	発展 平面の方程式			○理	×	※65
	発展 直線の方程式			○理	×	
※62 位置ベクトルという言葉が明確化されていないが、位置ベクトルと同等の内容は扱っている。例題が不足している。						
※63 ベクトル方程式という言葉が明確化されていないが、ベクトル方程式と同等の内容は扱っている。						
※64 空間ベクトルでは、位置ベクトルという記述がみられた。内分・外分・重心に関する記述はみられなかった。						
※65 法線ベクトルに関する表記はあるが、平面の方程式に関する記述はみられなかった。						

	A	B	C	EJU	補足
3章 数列					
1節 数列とその和					
3.1.1 数列			○	○理	※66
3.1.2 等差数列とその和					
3.1.2.A 等差数列	○			○理	
3.1.2.B 等差数列の性質	○			○理	
3.1.2.C 等差数列の和	○			○理	
3.1.2.D いろいろな自然数の数列の和	○			○理	
3.1.3 等比数列とその和					
3.1.3.A 等比数列	○			○理	
3.1.3.B 等比数列の和	○			○理	
研究 福利計算と等比数列	○			×	
3.1.4 和の記号 Σ					
3.1.4.A 累乗の和			○	○理	
3.1.4.B 和の記号 Σ			○	○理	
3.1.4.C Σ の性質			○	○理	
コラム 複利のワナ			○	×	
3.1.5 階差数列					
3.1.5.A 階差数列			○	○理	
3.1.5.B 数列の和と一般項			○	○理	※67
3.1.6 いろいろな数列の和					
3.1.6.A 和の求め方の工夫			○	○理	
3.1.6.B 群数列			○	○理	
2節 数学的帰納法					
3.2.7 漸化式と数列					
3.2.7.A 漸化式		○		○理	※68
3.2.7.B 漸化式で定められる数列の一般項			○	○理	
3.2.7.C 漸化式の応用			○	○理	
研究 確率と漸化式			○	○理	
発展 隣接3項間の漸化式			○	○理	
発展 2つの数列の漸化式			○	○理	
3.2.8 数学的帰納法					
3.2.8.A 数学的帰納法による等式の証明	○理			○理	
3.2.8.B 数学的帰納法による整数の性質の証明			○理	○理	
3.2.8.C 数学的帰納法による不等式の証明	○理			○理	
3.2.8.D 漸化式と数学的帰納法			○理	○理	
コラム フィボナッチ数列			○理	×	
4章 確率分布と統計的な推測					
1節 確率分布					
4.1.1 確率変数と確率分布	○理			×	
4.1.2 確率分布の期待値と分散					
4.1.2.A 確率変数の期待値	○理			×	
4.1.2.B 確率変数の分散と標準偏差	○理			×	※69
4.1.3 確率変数の変換	○理			×	※70
4.1.4 確率変数の和と期待値					
4.1.4.A 同時分布			○理	×	
4.1.4.B 確率変数の和の期待値			○理	×	
4.1.5 独立な確率変数と期待値・分散					
4.1.5.A 確率変数の独立			○理	×	
4.1.5.B 事象の独立と従属			○理	×	※71
4.1.5.C 独立な確率変数の積と期待値			○理	×	
4.1.5.D 独立な確率変数の和の分散			○理	×	
4.1.6 二項分布					
4.1.6.A 二項分布	○理			×	
4.1.6.B 二項分布の平均と分散			○理	×	※72
4.1.7 正規分布					
4.1.7.A 連続型確率分布とその分布	○理			×	
4.1.7.B 正規分布	○理			×	
4.1.7.C 標準正規分布		○理		×	※73
4.1.7.D 正規分布の応用			○理	×	
4.1.7.E 二項分布の正規分布による近似			○理	×	
2節 統計的な推測					
4.2.8 母集団と標本					
4.2.8.A 全数調査と標本調査	○			×	
4.2.8.B 乱数表による無作為抽出	○			×	
4.2.8.C 母集団分布			○	×	
4.2.8.D 復元抽出・非復元抽出			○	×	
4.2.9 標本平均とその分布					
4.2.9.A 標本平均の期待値と標準偏差			○	×	
4.2.9.B 標本平均の分布と正規分布			○	×	
4.2.9.C 大数の法則			○	×	
4.2.10 推定					
4.2.10.A 母平均の推定			○	×	
4.2.10.B 母比率の推定			○	×	
コラム 正規分布の発見			○	×	
※66	末項という表記に関する記述はみられなかった。				
※67	$1^2 + 2^2 + \dots + n^2 = n(n+1)(2n+1)/6$ のみ記述がみられた。数学的帰納法の単元(理系)で証明されている。				
※68	アルゴリズムと証明という章において同等の内容を扱っているが、漸化式という記述はみられなかった。				
※69	期待値を使用した分散・標準偏差の公式に関する記述がみられなかった				
※70	標準偏差の公式に関する記述はみられなかった。				
※71	従属という言葉の表記はみられなかった。				
※72	標準偏差の公式に関する記述はみられなかった。				
※73	内容に関する説明はみられなかったが、章末問題で標準正規分布を利用する問題の記述がみられた。				